

## 青年期における挫折経験過程と希望の関連

大石郁美・岡本祐子

The relations between process of the failure experience and hope in adolescence

Ikumi Oishi and Yuko Okamoto

本研究では青年期における希望と挫折経験及びアイデンティティ、目標との関連を検討することを目的とした。研究Ⅰの質問紙調査の結果、希望とアイデンティティは全ての側面、目標とは確信度、準備性、満足度、達成手段において関連がみられた。また、過去の挫折経験の有無によって希望の高さに差がみられないことが示された。研究Ⅱでは、挫折経験と未来の捉え方に関して半構造化面接を行った。その結果、挫折経験以前は「自己信頼感」を持ち、未来に対しては『漠然とした見通し』『肯定的見通し』『具体的見通し』『短期的見通し』を持っている。しかし、挫折経験以後は見通しを失い否定的感情に支配される『希望の喪失』を引き起こし、「自己不信感」に陥ることが示された。また、その後「努力」をしていく中で他者の支えや課題達成によって自信が回復し、希望も回復するという過程が見出された。最終的には、「肯定的意味付け」あるいは「否定的意味付け」の段階に至ることが示され、このような挫折経験の意味付けに他者の支えが影響していることが示唆された。

キーワード：青年期，挫折経験，希望，アイデンティティ，目標

### 問題と目的

#### 1. 希望の概念

Erikson (1959 小此木訳 1973) は、漸成発達図式において、発達の第Ⅰ段階である乳幼児期の心理社会的危機を「基本的信頼感 対 基本的不信」とし、危機のプラスの解決の結果「希望」が人格的活力として獲得されるとした。

北村 (1983) は、希望に関する諸家の説と辞書による定義を検討し、希望を特定の目的や目標の達成にかかわる願望や期待の場合と区別すべきことを指摘した。そして、希望を「来るべき未来の状況に明るさがあるという感知に伴う快調をおびた感情である。希望は特定の目的の実現や、特定の目標への到達を目ざすものではないが、人生の特定されない価値や意義が実現される視界または境域としての未来が信頼できるという明るい感情」と定義している。この定義は、Erikson の考え方を色濃く反映していると考えられる (渡辺, 2005)。北村 (1983) は希望というものの根拠が不確実

である未来への明るい信頼にあるとし、未来への信頼感が自分の内外に求められることを指摘した。先行研究においても、希望と自己への信頼、他者への信頼との関連が示唆されている (e.g., 渡辺ら, 2004; 比嘉・岡本, 2007)。

## 2. 青年期における希望

現代社会では、将来の生活の予測可能性が徐々に低くなっていることに加え、様々な格差が拡大に向っているため、努力が報われるかどうかという「希望の二極化」が引き起こされていると指摘されている (山田, 2005)。また、フリーターの人数は 178 万人 (厚生労働省, 2009) と 10 年間で倍増しており、15-24 歳の完全失業率は 8.7%となっている (厚生労働省, 2010)。このような現代の日本社会で生活する青年は、希望を抱きにくくなっていると考えられる。したがって、青年の希望に焦点を当てて研究をすることは非常に意義深いと考えられる。

## 3. 青年期における挫折経験

青年期は、自己の能力の評価をおこない、自ら目標を設定して行動していくことが求められる。しかし、その過程において挫折を経験することは珍しいことではない。神原 (2009b) の研究では、青年期後期に至るまでに挫折を経験している人は 7 割近くにのぼることが示されている。挫折とは失敗とどのように違うのであろうか。神原 (2009a) はネガティブライフイベントを持つ、ただの失敗と捉えられやすさと挫折と捉えやすさの比較を行っている。その結果から、挫折と捉えやすい出来事は、失敗に捉えやすい出来事に内包されている可能性があるとして指摘している。一方、神原 (2009b) は、出来事の捉え方という視点においては挫折と失敗との違いがあることを示している。結果から、挫折と失敗の捉え方には「頻度」、「回復」、「成長」、「転機」という共通する 4 側面があること、さらに挫折は失敗よりも転機として捉えられやすく、頻度よりも回復の難しさという点に焦点が当てられやすいことが示唆された。また、挫折経験のある者の 96%が対象に主観的価値、特に達成価値を感じていたこと (76%) が示されている。このため、挫折を経験した時は失敗の時より衝撃は大きくなると考えられる。古木・森田 (2009) は、大学生を対象にして挫折経験から自己受容に至るプロセスを半構造化面接によって質的に検討おり、挫折を経験した直後には《良い結果を出せない苦しさ》、《自分を信じられない状態》を体験するとしており、挫折経験初期において自己信頼感の低下を引き起こすことを示している。そのため、自己信頼感との関連が見られる希望にも影響を及ぼすことが推測される。したがって、挫折経験によって希望に影響があるのかどうかを検討する必要があると考えられる。

## 4. 青年期における発達の課題と希望の関連

Lewin (1951 猪俣訳 1979) は、青年期は時間的展望を拡大する時期であるとともに時間的展望の分化期であるとし、未来の生活空間において現実と非現実の水準が漸次分化し、時間的展望を再構築しなければならないと述べている。このような認知的発達を基礎にしながらか青年期においては自分の将来のことについてより具体的に、より遠くのことまで考え、見通すことができるようになる。したがって、自分自身の過去を振り返りつつ、未来の目標の実現に向けて生きていくことが青年期になって初めて可能になる (都筑, 1993)。また、都筑 (1997) は、青年は未来志向的な傾向をもち、自分の人生におけるより長期的な目標を思い浮かべるだけでなく、その目標実現のために努力する

よくなるという指摘をしている。以上から、青年期においては目標形成が重要な課題であるとともに、それについて努力することが必要だといえる。先行研究で希望と目標に密接な関連があることは指摘されているが、実際に目標のどのような側面に影響を及ぼしているかどうかはこれまで検討されていない。

一方、Erikson et al. (1986 朝長・朝長訳 1990) は希望の力が、後に続く全ての心理社会的な力が健康的に発達するための支えとなり、これまでの全ての心理社会的課題の再統合と非常に密接な関係があるとしている。すなわち、希望は青年期における発達段階の心理・社会的危機を統合するための基礎となると考えられる。青年期の最も重要な心理社会的発達課題は、青年がいかにしてアイデンティティを確立していくかという点にある (Erikson 1959 小此木訳 1973)。アイデンティティとは「自己の単一性、連続性、不変性、独自性の感覚を意味する」(小此木, 2002)。都筑 (1999) が示した時間的展望と自我同一性との関連についての仮説的な図式によれば、現在の自分が人生の将来目標を立てようとするときに、過去のことを再解釈したり、再定義し、同時に、未来の自分の目標・出来事を思い浮かべ、その実現を期待したり、希望することを通じて、過去・現在・未来の自分を統合的にとらえて時間的展望を確立し、その結果、自我同一性を達成するという一連の過程が示されている。ここから、希望をもつことが連続性の感覚、そしてアイデンティティの確立を促進することが推測される。しかし、両者の関係に焦点をあてて検討した実証的研究はこれまでにはなく、その関係性は明らかになっていない。

## 5. 本研究の目的

以上より、本研究では青年期における希望と挫折経験及び発達課題との関連を検討する。研究Ⅰでは質問紙を実施し、希望と青年期の発達課題、過去の挫折経験との関連を数量的に検討する。青年期の発達課題としては、希望との関連が想定されていながらも、その関連が明らかになっていないアイデンティティと目標をとり扱う。研究Ⅱでは半構造化面接を実施し、挫折経験過程における希望の推移を検討する。なお、本研究での挫折経験の定義は、「学業、人間関係、部活動など、自分にとって重要である事柄での失敗、いい結果が得られないといった経験」(神谷・伊藤, 1999)と定義する。

## 研究Ⅰ

### 1. 目的

質問紙調査を行い①過去の挫折経験の有無と現在の希望の高さに関するのかを数量的に検討する。また、②希望とアイデンティティ及び目標の特性との関連を数量的に検討する。

### 2. 方法

**調査対象者** 大学生・大学院生 172 名 (男性 70 名, 女性 102 名)。平均年齢 19.93 歳 ( $SD = 1.07$ )。

**調査時期** 2010 年 4 月下旬・5 月上旬

**質問紙の構成** ①将来目標リストアップ法 (都筑, 1997) : 将来の目標を最大で 5 個自由記述, それぞれの諸特性を 9 項目, 5 件法。②日本語版 Herth Hope Index (以下, 日本語版 HHI ; 小泉ら, 1999) : 12 項目, 4 件法。③多次元自我同一性尺度 (以下, MEIS ; 谷, 2001) : 20 項目, 7 件法。④挫折

経験の質問：(1) 挫折経験の有無、(2) 挫折経験の内容 (3) 挫折経験年齢 (4) 1) どんな気持ちを体験して、2) 今、思い出してみるとどのように感じるのかを自由記述。

手続き 講義時間終了後に質問紙を配布して、その場で回答を依頼した。

### 3. 結果と考察

#### 3-1. 因子分析

日本語版 HHI に対して因子分析 (主因子法・*promax* 回転) を行った結果、3 因子が抽出されたが、第 3 因子の負荷量が低く採用できる項目が少なかった。そこで、因子数を 2 に設定して同様の手続きで項目を採用した結果、2 因子 10 項目が抽出された (Table 1)。第 I 因子は、未来に対する自信や明るい見通しという項目内容であることから「肯定的見通し」、第 II 因子は、自己と他者など相互依存性と相互連帯感の知覚、それに伴うポジティブな感情という項目内容であることから「相互連帯感」と命名した。また、MEIS に対して固有値を 1 に設定して因子分析を行った (主因子法・*promax* 回転) 結果、谷 (2001) 同様、4 因子が抽出された。

Table 1  
日本語版 HHI の因子分析結果 (主因子法・*promax* 回転)

項目番号	項目内容	肯定的見通し	相互連帯感
10	私は自分の意思で方針を決めることができる。	.83	-.17
8	私は芯の強さを持っている。	.72	-.16
1	私は前向きな人生観を持っている。	.68	.00
2	私は将来に目標を持っている。	.61	-.05
11	私は日々可能性があると信じている。	.58	.33
6	※私は自分の将来が恐ろしく感じられる。	.52	.10
5	私は慰めや励ましを与えてくれる精神的な支えがある。	-.24	.83
7	私は幸せで楽しい時を思い起こすことができる。	-.14	.83
9	私は世話や愛情を与えたり受けたりすることができる。	.20	.49
3	※私は全く孤独だと感じる。	.15	.44
12	私は私の人生の意味と価値を持っていると感じる。	.42	.33
4	私は苦難にあっても一筋の希望の光を見いだすことができる	.41	.34
	$\alpha$ 係数	.82	.72
	因子寄与率	35.46	9.67
	累積因子寄与率	35.46	9.67
	因子間相関 F2	.53	—

※は逆転項目

#### 3-2. 挫折経験の内訳と挫折経験の有無による希望の高さの比較

挫折経験があると回答した方が 107 名 (62%)、なしと回答した方は 65 名 (38%)、挫折経験時の年齢は 7-22 歳であった (平均 16.30 歳,  $SD=2.53$  歳)。また、挫折経験の内容についての記述は 101 個であり、その内訳は「部活動」43 名、「進学」31 名、「人間関係」10 名、「学業」7 名、「失恋」2 名、「家庭」2 名、「退学」1 名、「不登校」1 名、「その他」4 名であった。

また、挫折経験の有無による希望の高さの比較をするために、 $t$  検定を行った。その結果、有意差はみられなかった。したがって、過去に挫折を経験したかどうかは現在の希望の高さに影響を及ぼさないことが示された。

### 3-3. 希望と目標の諸特性との関連

得られた目標について、都筑 (1997) を参考にカテゴリーに分類した。全体で得られた目標は 452 個であった (一人当たりの平均 2.63 個,  $SD=1.34$ )。カテゴリーに分類した内容別にみると、職業 (アルバイト含む) が 1 位 (33%)、教育 (勉強, 卒業, 単位, 留学, 大学院進学) が 2 位 (16%)、家庭が 3 位 (12%)、余暇 (趣味やサークル活動) が 4 位 (10%) となった。

日本語版 HHI 総得点と目標の諸特性の関連を検討するために、それぞれの平均値を算出して高群と低群に分けて  $\chi^2$  検定を行った。その結果、日本語版 HHI 総得点と目標の確信度 ( $\chi^2(1)=16.96, p < .01$ )、準備性 ( $\chi^2(1)=15.79, p < .01$ )、満足度 ( $\chi^2(1)=8.84, p < .01$ )、達成手段 ( $\chi^2(1)=10.20, p < .01$ ) との間に関連がみられた。これらの特性に関しては、日本語版 HHI 総得点低群では特性の高群の人数が有意に少なく、日本語版 HHI 総得点高群では有意に多いことが示された。つまり、希望が高い人の方が、達成した時の満足感が強い目標を実現できると確信し、目標を達成するための手段を多くもち、準備をしているといえる。一方、希望の高さは、目標の重要性や困難性、さらにその目標に向かって努力し、それを継続するかどうか、その目標には何の要因が影響しているとかどうかは関係ないといえる。したがって、希望の高さは目標達成の可能性の認識と関連は強いが、目標達成のための行動面には関連を示さないことが示された。ここから、青年が目標達成のために努力するためには、希望だけでは不十分であるということが推察された。

### 3-4. 希望とアイデンティティの関連

日本語版 HHI と MEIS の関連を検討するため、pearson の積率相関係数を算出した (Table 2)。その結果、日本語版 HHI の総得点及び各段階と MEIS の総得点及び各段階の全てにおいて有意な正の相関がみられた。つまり、希望が高い人は、自分が時間的連続性を持っている感覚、目指すべきものを明確に意識している感覚、社会と適応的に結びついている感覚、他者からみられている自分が本来の自分であるという感覚が全て強いことが示唆された。また、希望の高さとアイデンティティ感覚の関連は非常に強いことも示された。

Table 2  
日本語版 HHI と MEIS の相関

		日本語版 HHI		
		肯定的見通し	相互連帯感	総得点
M	対自的同一性	.66**	.27**	.60**
E	自己斉一性・連続性	.56**	.41**	.59**
I	心理社会的同一性	.57**	.35**	.57**
S	対他的同一性	.37**	.46**	.48**
	総得点	.69**	.47**	.71**

\*\* $p < .01$

## 研究 II

### 1. 目的

青年の多くが経験する挫折について、①心理状態の推移を明らかにし、②未来の捉え方の推移を明らかにする。③①と②を総合して挫折経験によって希望が変化するかを検討する。なお、その際、影響要因として他者の関わりも考慮に入れることとする。また、面接調査では意識レベルの希

望のみを扱うことになるため、北村(1983)を参考にして希望の定義は「意識レベルで将来への見通しを持って、かつ将来に対してポジティブな感情を抱いていること」とした。

## 2. 方法

**調査対象者** 研究Ⅰによる質問紙調査の参加者で挫折の経験があると回答し、面接調査協力を了承して下さった方、筆者の知人の紹介によって研究への協力を了承して下さった方 15 名(女性 14 名、男性 1 名)。平均年齢は 20.00 歳(19-20 歳)。挫折経験時の平均年齢は 17.07 歳(15-18 歳)。挫折の内容は進学 8 名、対人関係 4 名、部活動 2 名であった。

**調査時期** 2010 年 8 月-11 月

**手続き** 大学の調査室で半構造化面接による調査を実施した。面接調査実施前に、本研究の目的、倫理的な問題の配慮について説明した。その上で録音および筆記記録、研究結果の公表に関する承諾を得、同意の署名をもらった。面接回数は一回で、所要時間は 40 分-120 分であり、面接記録は逐語録を作成した。なお、本研究を実施するにあたり広島大学教育学研究科倫理審査委員会の承認を得た。

**調査内容** 最初の教示として「経験された挫折の詳しい内容と、その時感じたことを自由にお話し下さい」と伝えた。①挫折経験の現実的経過、②挫折経験以前、以後における心理的変容、③挫折経験以前、以後における未来イメージとそれに伴う感情、④家族、友人との関わり、⑤挫折経験の捉え方、⑥挫折経験の影響の 6 つの視点から構成された。

**分析方法** ①録音記録をもとに逐語録を作成した。②挫折経験前後に伴う心理状態、未来及び他者に関する語りを文章単位で抽出し、それらを内容別に要約した。③類似したものをグルーピングしてラベリングを行った。④得られたカテゴリを下位カテゴリとし、さらに類似した意味内容を持つ下位カテゴリをグルーピングした。⑤対象者の上位カテゴリの推移を総合し、挫折経験の心理状態及び未来の捉え方のプロセス図を作成した。⑥挫折の捉え方に着目して群分けを行い、プロセス図の比較を行った。信頼性を検討するため、臨床心理学を専攻する大学院生 1 名が評定を行った結果、カテゴリの一致率は心理状態 87.20%、未来の捉え方 71.88%、他者との関わり 89.47%であった。なお分類が一致しない場合は協議の上、分類を決定した。

## 3. 結果と考察

### 3-1. 挫折経験過程における心理状態

分析の結果心理状態に関する語りの総数は 125 個であった。分析①-④を行い、上位カテゴリ 14 個、下位カテゴリ 36 個が得られた。この 14 個のカテゴリ(「自己信頼感」、「衝撃」、「納得」、「情緒的混乱」、「自己不信感」、「否認」、「努力」、「自信の回復」、「客観的視点の獲得」、「自分自身への直面化」、「責任感」、「現状への満足」、「肯定的意味付け」、「否定的意味付け」)を、挫折経験過程の心理状態像とした。各状態像の特徴を Table 3 に示した。

Table 3  
挫折経験における心理状態の各段階の定義と下位カテゴリ

時期	段階	定義
挫折以前経験	自己信頼感	これまでの成功体験などから自分の能力に対して信頼感を抱いている状態。 ＜自己信頼感＞
	衝撃	自分が望んでいた結果が得られなかったことに対する心理的ショック状態。それに伴う気分の落ち込み。＜ショック＞＜落ち込み＞
挫折経験以後	納得	自分の能力やこれまでの頑張り評価した上で結果について自分なりに納得している状態。または、結果が出たことによって一時的に解放感を感じている状態。 ＜納得＞＜解放感＞
	情緒的混乱	挫折を経験したことによって生じる後悔やつらさなど情緒的に混乱している状態。また、努力不足や自己決定に対して疑いや自責感を抱いている状態。 ＜辛さ＞＜後悔＞＜不安＞＜悔しさ＞＜怖さ＞＜悲しさ＞＜葛藤＞＜疑問＞
	自己不信感	挫折を経験することで、自信を喪失し否定的な自己イメージを持つ状態。 ＜自信の喪失＞＜自己否定＞＜劣等感＞＜孤独感＞＜情けなさ＞
	否認	現実を受け止めたくないために、ありえないことを想像して精神的安定を保とうとしている状態。＜否認＞
	努力	状況を改善するために気持ちを切り替えて、勉強や目の前の仕事などに積極的に取り組む状態。＜切り替え＞＜努力＞
	自信の回復	他者に受け入れられること、努力が報われることや他分野での意味を見出すことで自信が持てるようになる状態。 ＜受け入れられた喜び＞＜努力が報われる喜び＞＜他分野で意味を見出す＞
	客観的視点の獲得	時間的経過によって客観的視点を獲得して状況を冷静に捉える事が出来るようになった状態。＜客観的視点の獲得＞
	自分自身への直面化	挫折の経験を通して、これまで自覚していなかった自分の特徴や限界などを受け容れていく状態。＜自分の弱さ・限界を受け容れる＞＜自分を知る＞
	責任感	自分一人で決断を下すことで、自分の人生に対しての責任を負うことを自覚した状態。 ＜責任感＞
	現状の満足	現在の状態に対して充実感や満足感を感じている状態。＜現状への満足＞
	肯定的意味付け	挫折経験での自分の頑張りを認めるとともに、経験を自己に位置づけ今後活かすことを考え連続性を認識している状態。 ＜連続性＞＜経験の肯定＞＜今後活かす＞＜自己成長感＞
	否定的意味付け	挫折経験自体に否定的な意味付けをしたり、経験自体を抑圧して自己に位置づけられていない状態。＜抑圧＞＜経験の否定＞＜過去を引きずる＞

### 3-2. 挫折経験における未来の捉え方

未来の捉え方に関する語りの総数 96 個であった。分析①-④を行い、上位カテゴリ 13 個、下位カテゴリ 34 個が得られた。この 13 個のカテゴリ（「漠然とした見通し」、「短期的見通し」、「肯定的見通し」、「具体的見通し」、「希望の喪失」、「希望の回復」、「連続性」、「終わりからの逆算」、「目標の明確化」、「実現可能性の考慮」、「将来に対する模索」、「長期的見通し」、「見通しのなさ」）を、挫折経験における未来の捉え方の状態像とした。各状態像の特徴を Table 4 に示した。

Table 4  
挫折経験における未来の捉え方の各段階の定義と下位カテゴリ

時期	段階	定義
挫折経験以前	漠然とした見通し	将来の不明確さよって漠然とした短期的な見通ししかもてていない状態。 ＜漠然とした見通し＞＜先送り＞
	短期的見通し	受験など目の前の課題でに対してしっかり取り組もうとする状態であるが、長期的な見通しは持っていない状態。挫折経験後においても継続する。 ＜短期的見通し＞
	肯定的見通し	これまでの経験から今後なんとなくかなるんじゃないかという楽観的な見通しを持っており、挫折してしまう可能性はほとんど考慮していない状態。 ＜楽観性＞＜肯定的見通し＞＜成功の予期＞
	具体的見通し	具体的な夢や期待を抱いており、それを達成することに価値をおいている状態。 ＜期待＞＜憧れ＞＜夢を持つ＞＜目標＞
挫折経験以後	希望の喪失	未来に対しての意識レベルでの見通しを持ってなくなっている、あるいは未来に対して否定的な感情を持っている状態。＜お先真っ暗＞＜連続性の断絶＞＜イメージの喪失＞＜人生を終わりにしたい＞＜否定的見通し＞
	希望の回復	未来に対して意識レベルでの見通しを持ち、かつその見通しに対して肯定的な感情を抱けるようになった状態。 ＜希望の光＞＜漠然とした見通し＞＜楽観性＞
	連続性	過去、現在、未来の連続性を意識して未来を捉えられるようになった状態。これまで学んできたことを今後につなげようとする意識も含む。 ＜連続性＞＜学びを活かしたい＞
	終わりからの逆算	未来のことを考える際に、活動や仕事の終わりから逆算して捉えており、活動に積極的に関与できていない状態。＜終わりからの逆算＞
	目標の明確化	目標を明確化することで日々すべきことを決め、動機づけを高めようとする状態。 ＜目標の明確化＞
	実現可能性の考慮	挫折を経験する以前よりも実現可能性を考慮して、自分に合った目標を設定するようになった状態。＜実現可能性の考慮＞
	将来に対する模索	自分の将来に対して迷いを感じながらも、情報収集や自分にできることを考えて模索している状態。将来の進路について考えている状態。 ＜自分にできることを考える＞＜情報収集＞＜迷い＞
	長期的見通し	今後の人生において成長していきたい、普通の幸せに生きたいなど長期的な視点での見通しを持っている状態。＜上昇志向＞＜安定志向＞
	見通しのなさ	現在、どんな仕事に就職して、どんな生活を送るのかをイメージできていない状態。社会に出ることに関しての不安を抱き、考えること自体に抵抗を持っている状態。＜将来を考えたくない＞＜就職している自分をイメージ出来ない＞＜結婚のイメージが持てない＞＜将来に対する不安＞＜疑い＞＜未知＞



### 3-3. 挫折経験過程と未来の捉え方の関連

分析⑤を行い未来の捉え方の推移を明らかにし、心理状態の推移に加えたものを Figure 1 に示した。尚、プロセス図における上位カテゴリの採用には心理状態では 3 人以上、未来と捉え方では 2 人以上が該当することを基準とした。

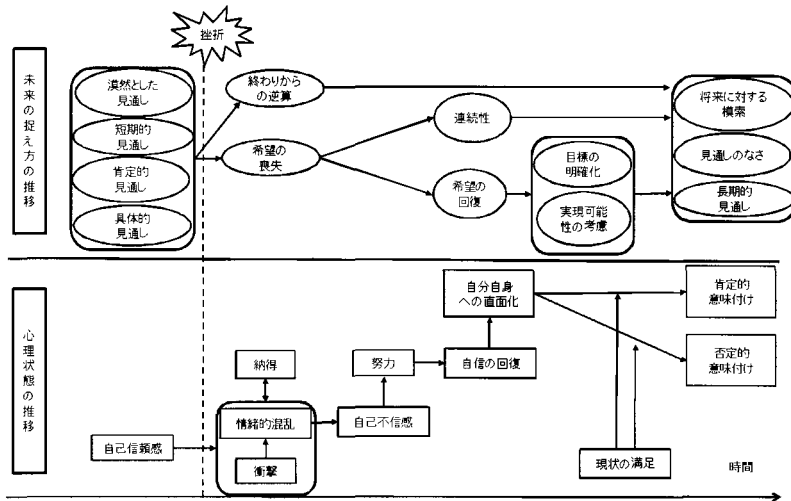


Figure 1. 挫折経験過程と未来の捉え方

注1) □は心理状態  
注2) ○は未来の捉え方  
注3) ⇄ は行きつ戻りつのプロセスを示す。  
注4) □はどちらか一方のみを通過する場合も含まれる。

**挫折経験過程** 分析の結果、青年期における挫折経験過程が見出された（上位カテゴリは「」，下位カテゴリは<>で記す）。まず、挫折を経験する以前は「自己信頼感」の状態にある。この状態は、これまでの成功体験などから自分の能力に対して信頼感を抱いている状態である。挫折を経験すると全員が「衝撃」あるいは「情緒的混乱」の状態に移行する。「情緒的混乱」は挫折を経験したことによって生じる“もっと勉強すればよかった”など自分の努力不足に対して、または“あの時にやめておけばよかった”と部活に入った、役職についた自己決定に対する後悔や自責感、疑い、つらさなどにより情緒的に混乱している状態である。「情緒的混乱」の状態に移行しており、「情緒的混乱」に該当した者は13名であったことから、挫折経験直後はほぼ全員が情緒的に混乱した状態に陥ると考えられる。挫折経験が青年に及ぼす影響の強さがここから窺うことができる。

「情緒的混乱」からは「納得」または「自己不信感」に移行する。「納得」で失敗の理由を考えるとや試験、活動が終わったこと自体に着目することは、精神的安定を取り戻すことができると考えられる。しかし、「納得」と「情緒的混乱」が行きつ戻りつする関係であったことから、「納得」による安定は一時的なものに過ぎず、その後再び「情緒的混乱」に陥る過程が示された。

そして、このような「情緒的混乱」を抜け出すと「自己不信感」に移行する。この状態は11名が該当し、多くの者が経験する状態であると考えられる。しかし、「自己不信感」を抱きながらも、「努力」を行うようになる。「努力」を経ると「自信の回復」に至る。「自信の回復」は9名が該当していたことから、一旦「自己不信感」に支配されても、多くの場合は「努力」によって「自信の回復」に至るとい過程が示されたと考えられる。

その後、「自分自身への直面化」に移行する。この段階には12名が該当している。具体的な内容としては、“自分がどうして出来なかったのかを認めることができ、自分の限界や弱いところと向き合えるようになった”、“今までやればできると思っていたがどんなに頑張ってもできないことがあると実感した”などのポジティブな発言と、“自分が表に立つ人間ではないと知った”や“自分が目立つキャラだって、立ち位置を勘違いしてた”というネガティブな発言がみられた。どちらにおいても、挫折経験によって自分や人に対する考え方や見方が変わっていることが窺え、神原(2009b)が指摘するように、挫折経験には転機という意味合いが含まれていることが示されたと考えられる。

その後、現在の状態に対して充実感や満足感を感じている「現状の満足」が関連して、挫折経験の「肯定的意味付け」あるいは「否定的意味付け」の状態に移行する。「現状の満足」を感じている3名中1名は「否定的意味付け」に至っていることから、「現状の満足」があるかどうかによって挫折経験の捉え方が規定されないと推察される。挫折経験に対する「肯定的意味付け」は、挫折経験をこれまでの自分の人生に位置付け未来につなげていくという連続性の認識がなされている状態と考えられる。これはアイデンティティの連続性の感覚と重なりと推察される。したがって、挫折経験を乗り越え「自分自身への直面化」を果たすことで自己の人生の中に自己を位置付けることに繋がり、その結果、アイデンティティの確立が促進されるという可能性が見出された。岡本(2007)は危機からの回復を支えるものは、危機体験によって断裂されたアイデンティティが、危機前の自分とこれからの自分との間でどのくらいつながっているか、どの程度その連続性が認識できるかというアイデンティティの連続性にあるとしている。ここから、「肯定的意味付け」に至ることによって挫折経験という危機体験から回復することにつながるのではないかと考えられる。一方、「否定的意味付け」では連続性の感覚は得られておらず挫折経験がアイデンティティの確立を促進したとは考えにくい。また、挫折経験という危機体験から回復がなされていない可能性も示唆された。

本研究で示された挫折経験過程は、古木・森田(2009)と挫折を経験した直後は苦しさを感じ、自己不信感が高まるがその後自分自身との直面化をし、新たな努力による自信の回復の段階に移行する点で、ほぼ同様のプロセスとなったと考えられる。しかし、古木・森田(2009)は挫折を経験した自己の受容プロセスとして検討しているのに対し、本研究では挫折を経験した自己をどのように位置付けていくのかという視点で検討を行っている。そのため、「挫折を経験した自分自身と直面して自己の中に意味付ける」過程が示された。そして、その意味付けとしては肯定的なものだけでなく、否定的なものがあることが明らかになったと考えられる。

**挫折経験過程と未来の捉え方の関連** 分析の結果、青年期における挫折経験過程に伴う未来の捉え方の推移が見出された(心理状態の上位カテゴリは「J」、下位カテゴリは<>、未来の捉え方の上位カテゴリ『J』、下位カテゴリは<>で記す)。挫折を経験する以前、「自己信頼感」をもっている時は、未来に対しては『漠然とした見通し』、『肯定的見通し』、『具体的見通し』、『短期的見通し』を持っている。Lewin(1951 猪俣訳 1979)は、青年期は未来の生活空間において現実と非現実の水準が漸次分化するとしている。本研究の『漠然とした見通し』は青年期前期という現実の水準が十分では段階であるため、漠然とした状態しか思い起こせていない状態だと考えられる。また、青年期においては、就職・結婚に至るまでの出来事、特に教育制度の節目によって文節されているために、

将来展望は狭まるとされる（白井，2002）ため、『短期的見通し』がみられたと考えられる。調査対象者の多くが進学での挫折経験であったため、自ずと時間的な広がりも狭くなったのだと推察される。また『短期的見通し』は挫折経験後においても継続することが示されたことから、受験などの節目が終わるまでは長期的見通しをもつことが難しいと考えられる。『肯定的見通し』については、多くの者が「自己信頼感」を有していたため、未来の捉え方も明るいものとなったと考えられる。さらに、『具体的見通し』の記述には“父親の行っていた学校に憧れていた”，“先輩が応援団長をやっているいいなと思った”などがあり、青年が周囲の人々をモデルとして取り入れていることが窺われた。

以上のように、挫折経験以前は未来に対しての見通しと肯定的感情を有していることが示されており、希望がある状態であると考えられる。また、挫折経験以前は「自己信頼感」を有して『肯定的見通し』の状態にあることから、将来の失敗の予期や否定的な感情を持っていないと予想される。このため、失敗を受け入れきれずに失敗ではなく挫折として受け取られた可能性が示された。

挫折を経験した直後に「衝撃」，「情緒的混乱」の状態にある時は『希望の喪失』，あるいは『終わりからの逆算』が生じることが示された。『希望の喪失』の下位カテゴリは《お先真っ暗》，《連続性の断絶》，《イメージの喪失》，《人生を終わりにしたい》，《否定的見通し》の5つがみられている。ここから、挫折経験によって、将来については考えられない、考えられても否定的になってしまう状態に陥ることが示唆された。青年のこのような状態を引き起こした要因として、挫折経験以前の見通しの持ち方があげられる。挫折経験以前は、短期的・漠然とした・肯定的見通しであるため、他の可能性に目が向きにくい状況や否定的な現実に対する戸惑いが生じた可能性も考えられる。このため、『希望の喪失』が引き起こされたと考えられる。『終わりからの逆算』は、未来のことを考える際に、活動や仕事の終わりから逆算して捉えており、活動に積極的に関与できていない状態である。このため、未来についても『終わりからの逆算』についての語り以外みられず、意味付けの段階に至っている。

そして「自己不信感」を感じながらも「努力」をして「自信の回復」に至ると、『希望の喪失』から『希望の回復』，『連続性』がみられるようになる。『希望の回復』の下位カテゴリは《希望の光》，《漠然とした見通し》，《楽観性》となった。ここで、調査者が「希望」という言葉を用いていないにも関わらず、対象者自ら《希望の光》という発言をしたことは非常に興味深い。都筑（2004）は「絶望のなかでこそ、希望が存在すると思えてくるのではないだろうか」と述べているが、この下位カテゴリはそれを裏付けるものだと考えられる。また、『希望の回復』が「自信の回復」に伴って出現したことから、希望が自己信頼感に基づいて形成されるものであることが示唆されたと考えられる。

『連続性』は、過去、現在、未来の連続性を意識して未来を捉えられるようになった状態であり、これまで学んできたことを今後につなげようとする意識も含む。この状態は、肯定的意味付けでの《連続性》の前段階として、時間の関連性を認識して自分の人生における時間的連続性を認識した状態ではないかと推察される。

さらに、「自分自身への直面化」をして『実現可能性の考慮』や『目標の明確化』を行うようにな

る。どちらも、現実的水準が区別され、対照の特定化が行われていることを示している。ここで、『実現可能性の考慮』、『目標の明確化』が「自分自身への直面化」にともなってみられていることから、自己と向き合い、受け容れていくことが、現実的水準の区別、対象の特定化を促進したと考えられる。また、『実現可能性の考慮』、『目標の明確化』は『希望の回復』の後にみられていることから、『希望の回復』によってポジティブな見通しをもつと、より現実的で具体的な見通しに移行することが示された。白井 (2002) は青年期には、将来展望の空想と現実の次元が区別されること、目標手段関係の認知が発達するに伴い、将来の目標を達成するための現在の行動が重要になると指摘しており、本研究の結果と一致している。

その後、「肯定的意味付け」、「否定的意味付け」の段階に至る時は、未来に対して『将来に対する模索』をし、『長期的見通し』を持つものの『見通しのなさ』を抱えている状態に至る。『将来に対する模索』に該当した者は12名であったことから、青年期においては多くの者が『将来に対する模索』を行っていることが示された。これは青年が将来の職業選択をする必要性に迫られているためであると考えられる。『長期的見通し』がみられたことから、より長期的な視点での見通しを抱けるようになってきていることが示されており、年齢が高くなるほど時間的展望は長くなる(都筑, 1982)という認知的な発達によるものだと考えられる。また、受験などが終わったことでより遠い未来も見通せるようになったことも関連していると考えられる。一方で、『見通しのなさ』がみられており、青年が、将来への模索をしながらも、先の見えない不安を抱えている様子を窺うことができた。

### 3-4. 挫折経験の捉え方による挫折経験過程の比較

他者の関わりに関する語りの総数38個であった。分析①-④を行い、上位カテゴリ4個、下位カテゴリ14個が得られた。この4個のカテゴリ(「支え」、「認められる」、「支えを得られない」、「表面的な関わり」)を挫折経験における他者の関わりとした。各関わり の定義をTable 5に示した。

Table 5  
挫折経験における他者の関わり の定義と下位カテゴリ

上位カテゴリ	定義
支え	家族、先生、友人からの助言や励ましなどによる支え。 <励まし><応援><支え><味方><理解>
認められる	先生、友人から自分の頑張りや長所を褒められる、または感謝される。 <褒められる><感謝される>
支えを得られない	良好な友人関係が形成できないことや、周囲からどのように思われるか 気にして支えを得られない。 <冷たい反応><関係の悪化><相談できない>
表面的な関わり	支えを得られなかったことによって、友人関係において距離を置いた表面的な関わり方をする。 <表面的な関わり><距離を置く><演技する>

分析⑥を「肯定的意味付け」に至った対象者と「否定的意味付け」に至った対象者という視点で行った。その結果、「肯定的意味付け」に至った対象者は10名、「否定的意味付け」に至った対象者は5名に群分けされた。次に、他者の関わり の視点を交えて、群ごとの対象者の上位カテゴリの推移を総合し、挫折経験の心理状態及び未来の捉え方のプロセス図を作成した。その結果をFigure 2, Figure 3に示す。尚、上位カテゴリを採用には他者との関わり の上位カテゴリの採用には3人以上、心理状態及び未来の捉え方では、1人以上が該当することを基準とした。

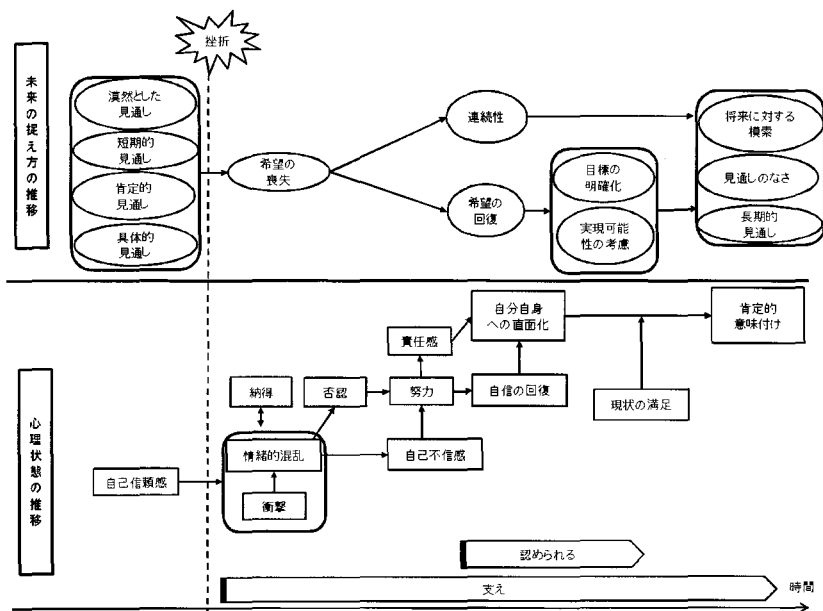


Figure 2. 挫折経験過程と未来の捉え方 (肯定的意味付け群)

注1 □は心理状態  
 注2 ○は未来の捉え方  
 注3 ◻は他者との関わり。  
 注4 ⇄は行きつ戻りつプロセスを示す。  
 注5 ◻はどちらか一方のみを通過する場合も含まれる。

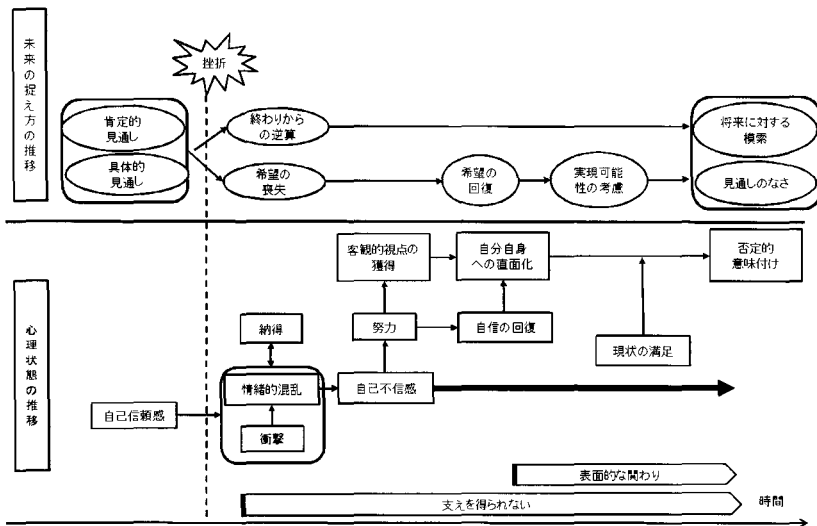


Figure 3. 挫折経験過程と未来の捉え方 (否定的意味付け群)

注1 □は心理状態  
 注2 ○は未来の捉え方  
 注3 ◻は他者との関わり。  
 注4 ⇄は行きつ戻りつプロセスを示す。  
 注5 ◻はどちらか一方のみを通過する場合も含まれる。  
 注6 →は以降の段階においても継続される状態

### 3-5. 挫折経験の捉え方による挫折経験過程の比較

(心理状態と他者との関わりの上位カテゴリは「」, 下位カテゴリは<>, 未来の捉え方の上位カテゴリ『』, 下位カテゴリは<<>>で記す)。肯定的意味付け群と否定的意味付け群の挫折経験過程と未来の捉え方, 及び他者との関わりを比較した。その結果, 心理状態では, 肯定的意味付け群にの

み「否認」と「責任感」がみられたということ、否定的意味付け群では「自己否定感」が継続していること、「客観的視点の獲得」がみられたということが示唆された。「否認」、「責任感」、「客観的視点の獲得」では1名のみ回答であったため、特徴としては信頼性が弱いと考えられる。一方、「自己不信感」の継続性は複数みられ、「自分自身への直面化」でのネガティブな自己イメージは否定的意味付け群の特徴と考えられる。

未来の捉え方においては、肯定的意味付け群では『終わりからの逆算』がみられず、否定的意味付け群でのみみられたこと、否定的意味付け群で『連続性』、『目標の明確化』、『長期的見通し』がみられなかったことが示された。ここから、否定的意味付け群では、活動に積極的に関与できておらず、『連続性』、『目標の明確化』、『長期的見通し』に至らなかったことが推察された。また、『希望の喪失』、『希望の回復』などでは差がみられなかったことから、挫折経験の捉え方と希望への影響は関連がない可能性が示唆された。

他者との関わりにおいては、肯定的意味付け群では、「支え」が挫折経験当初から得られており、その後、「認められる」関わりによって「自信の回復」に至った。一方、否定的意味付け群では、「支えが得られない」が挫折経験当初から得られており、その後、「表面的な関わり」に移行し、自分が傷つかないように人と距離をおく対処法をとるようになることが示唆された。ここから、他者の「支え」が挫折経験の意味付けに影響していることが示された。また、否定的意味付け群の全員が挫折経験に他者との関わりでの否定的経験が関連していることから、挫折の内容が人間関係に関する内容だと否定的な意味付けに移行しやすい可能性が示唆された。

尚、否定的意味付け群は、「自信の回復」が十分になされていない群と考えることもできるため、今後他者との関わりや課題の達成などでさらなる「自信の回復」が生じた結果、意味付けが変化する可能性もあると考えられる。

## 総合考察

### 1. 本研究の結果のまとめ

本研究では、青年期における希望と挫折経験及び発達課題との関連を検討した。研究Ⅰでは、質問紙を実施し、希望と青年期の発達課題、過去の挫折経験との関連を数量的に検討した。研究Ⅱでは、半構造化面接を実施し、挫折経験過程における希望の推移を検討した。

研究Ⅰの結果からは、希望が目標への意識、アイデンティティと関連していることが示された。目標への意識からは、希望の高さは目標達成の可能性の認識と関連は強いが、目標達成のための行動面には関連を示さないことが示された。また、希望とアイデンティティの関連においては、希望が高い人は、自分が時間的連続性を持っている感覚、目指すべきものを明確に意識している感覚、社会と適応的に結びついている感覚、他者からみられている自分が本来の自分であるという感覚が全て強くなるということが示唆された。また、希望の高さとアイデンティティ感覚の関連はとても強いことも示された。さらに青年の半数以上が挫折を経験しており、内容は多様であること、中でも部活動と進学に関して挫折を経験している人が多いということが示された。さらに、過去に挫折を経験したかどうかは現在の希望の高さに影響を及ぼさないことが示された。しかし、研究Ⅰの結

果だけでは、挫折を経験したその時点でどのような影響を受け、内的体験をしているのかまで検討することは出来ていない。そこで、研究Ⅱにおいて、個人が挫折経験以前、経験後から現在に至るまでどのような心理状態希望を抱いてきたかを詳細に検討する必要があると考えた。

研究Ⅱでは、挫折を経験した時の青年の心理状態の推移を明らかにするとともに未来の捉え方を見ることで希望の変化を捉えることができた。結果から、「自己不信感」を抱きながらも挫折経験直後に希望の喪失が引き起こされても自信の回復に伴って希望が回復する過程が見出され、希望の回復後は、『実現可能性の考慮』や『目標の明確化』など、現実的水準が区別され、対象の特定化がなされることが示された。また、挫折経験の捉え方によって、肯定的意味付け群と否定的意味付け群に分けて比較を行った結果、否定的意味付け群では「自己不信感」が継続して存在すること「自分自身への直面化」でのネガティブな自己イメージがみられることが示された。未来の捉え方では、『終わりからの逆算』を考え積極的に課題に取り組みおらず、『連続性』、『目標の明確化』、『長期的見通し』がみられないこと示唆された。さらに、他者の「支え」を得られることによって挫折経験を自己に位置づけて連続性を認識しやすくなることが示された。また、否定的意味付け群の全員が挫折経験に他者との関わりでの否定的経験が関連していることから、挫折の内容が人間関係に関する内容だと自己に位置づけることが難しくなる可能性が示唆された。

## 2. 本研究の問題点と今後の課題

本研究の問題点としては2つのことが考えられる。1つ目は調査方法についてである。研究Ⅰでは、挫折についてその有無だけのみ扱っており、衝撃や意味付けなどその質的な差異については検討できていない。今後はより挫折経験についてその意味付けや衝撃の程度などを考慮した上で希望との関連をみていく必要があると考えられる。また、研究Ⅱでは半構造化面接を行ったため意識的側面のみにおける希望を扱うことにとどまっているため、今後は無意識的な側面についても検討していく必要がある。さらに、本研究で用いた質的分析の方法は、現在のところ確立されたものとは言いがたく、本研究で得られた結果は、仮説モデルとしての意味合いが大きい。今後、質的分析をさらに進めると同時に、質的研究で得られた知見を数量的に検討していくことも重要な課題である。2つ目に、本研究において挫折経験の捉え方には他者の支えが関連している可能性が示されたが、支えの質的な検討はなされていない。今後、どのような支えが挫折経験の捉え方に影響するのかを検討することによって、挫折を経験した人に対する心理的アプローチの方法への示唆に繋がるのではないかと考えられる。

## 引用文献

Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press.

(エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳) (1973). 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル— 誠信書房)

Erikson, E.H. & Erikson, J. M. & Kivnick, H.Q.(1986). *Vital involvement in old age*. New York: W.W.Norton & Company. (朝長正徳・朝長梨枝子(訳) (1990). 老年期—生き生きしたかかわりあい— みすず書房)

- 古木美緒・森田美弥子 (2009). 挫折経験から自己受容に至るプロセス—大学生を対象にして— 日本教育心理学会総会発表論文集, 51, 177.
- 比嘉麻美子・岡本祐子 (2007). 信頼感を基盤とした青年の未来展望形成プロセス 広島大学心理学研究, 7, 227-243.
- 神原知愛 (2009a). 大学生の挫折経験に関する心理学的考察 (2) 日本教育心理学会総会発表論文集, 51, 706.
- 神原知愛 (2009b). 大学生の挫折経験に関する心理学的考察—挫折観と自己成長感との関連— 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, 67, 59-66.
- 北村晴朗 (1983). 希望の心理 自分を生かす 金子書房
- 小泉美佐子・伊藤まゆみ・宮本美佐 (1999). 青年期の看護学生と高齢者の希望の比較に関する研究 群馬保健学紀要, 20, 103-112.
- 厚生労働省 (2009). フリーター数・ニート数の推移 2010年8月3日  
<<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/3450.html>> (2010年12月20日)
- 厚生労働省 (2010). 労働力調査 (基本集計) 平成22年11月分 (速報) 結果 2010年12月28日  
<<http://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/index.htm>> (2010年12月29日)
- 神谷俊次・伊藤美奈子 (1999). 挫折体験の受容と有能感 日本教育心理学会総会発表論文集, 41, 548
- Lewin, K. (1951). *Field theory and social science*. New York: Harper Collins Publishers.  
(猪俣佐登留 (訳) (1979) 社会科学における場の理論 誠信書房)
- 岡本祐子 (2007). アイデンティティ生涯発達論の展開 ミネルヴァ書房
- 小此木啓吾 (2002). 現代の精神分析—フロイトからフロイト以後へ— 講談社学術文庫
- 白井利明 (2002). 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成— 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 都筑 学 (1982). 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, 30 (1), 73-86.
- 都筑 学 (1993). 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41 (1), 40-48.
- 都筑 学 (1997). 大学生における将来目標の内容と構造 教育学論集 (中央大学教育学研究会), 39, 69-96.
- 都筑 学 (1999). 大学生の時間的展望—構造モデルの心理学的検討— 中央大学出版部
- 都筑 学 (2004). 希望の心理学 ミネルヴァ書房
- 渡辺弘純・渡邊 俊・David, S. C. ・中嶋恵美 (2004). 日本の児童生徒における希望, 信頼, 寛容の発達とその相互関連 愛媛大学教育学部紀要 教育科学, 50 (2), 17-35.
- 渡辺弘純 (2005). 希望の心理学について再考する—研究覚書— 愛媛大学教育学部紀要, 52 (1), 41-50.
- 山田昌弘 (2005). 希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く 筑摩書房